

「孤独」をつくらない地域の保育園を目指して

園長 志賀 教子

5月17日は、南小学校校区福祉委員主催のふれあい交流会が煉瓦館で行われました。アトムは正職員全員参加です。去年から呼んでいただいで一緒にしてきた交流会ですが、今年は一歩進んで、主任が園代表で立ち上げの企画会議から参加させてもらうなど、準備から地域の皆さんとご一緒にさせていただきました。ふれあい交流会のオープニングは、アトムの4、5歳児有志による南中ソーランで元気いっぱい幕を開けました。会場で、5歳児のりおなちゃんのママにこんな話を聞いたと後で教えてもらいました。「いつもは、お兄ちゃんのバスケの応援に行っている時間なんだけど、今日は、りおなが、どうしても南中ソーラン踊りたい、ママも見たいやろって譲らんかったん。これまで、お兄ちゃんの応援に文句も言わずについてきていたりおなが、こんなふうに強く自分がしたいことを主張することなかったから、びっくりしたし、うれしかったしで、こっちに参加したんや」。舞台上で一生懸命楽しそうに踊り、友だちと一緒に身体を精一杯動かしているりおなちゃんを涙ぐみながら動画におさめていたお母さんの様子を聞きながら、私も涙がでました。5歳児が、自分の意志でお母さんを地域に誘ってくれたことが、とってもうれしかったのです。

職員全員で地域に参戦

職員も舞台にたくさん出演させていただきました。マジックショーや、イリュージョン。とりを飾らせていただいた職員総出のマツケンサンバでは会場も大盛り上がりでした。地域の人に喜んでもらえたらという思いで、たこ焼きや和菓子を販売するなど、正職員全員でふれあい交流会に参加できたことも、とってもうれしいことでした。

当日駐車場に立った職員が、地域のおじさんとこんな会話をしたそうです。「昨年のふれあい交流会でアトムの舞台をみて、負けてられないなあって思って。今年は自分も舞台に出るんや」。この方だけでなく、ふれあい交流会に参加されていたたくさんの方から「アトムってすごいね。元気もらったわ！」と声をかけていただいたことは、もちろんとても嬉しい事でした。

でも、マツケンサンバを踊るときには、近くにいた地域のおばさんが職員に衣装の着物を着させてくれたり、駐車場の案内に立った保育士が背中真っ赤になりながら暑い中がんばったことを地域の方がねぎらってくださったり、たこ焼きやフランクフルトの販売にあたった若い職員が「スタバのコーヒースよ」ってがんばって声をかけていたら、「スタバってなんや」「氷ないんか」って地域のおじちゃんに返されてドキドキしたことも含めて、ぜんぶが私たち職員にとって、うれしい貴重な体験でした。

地域に育まれ、地域の助けになる日々

近年、地域の子ども会や老人会などが無くなったという話が耳に入ることも少なくありません。現にアトムの周りの地域でもどんどんなくなっています。職員会議で地域との関わりについて話をした際に、30代の職員が、自分が子どもの頃は、長生会や子ども会が憩いの家でにぎわい、カラオケ大会におじいちゃんおばあちゃんについて行って、そこでかわいがられたりお菓子をもらった記憶が何十年もたった今でも思い出として残っている。だから大人になった自分も、世代の違う他所の人に対する抵抗がなく、関わるのが楽しいんだと言いました。アトムの子どもたちも、自分の親以外の大人たち（友だちのお父さんやお母さん、地域のおじいちゃんおばあちゃん）と関わる経験が自分の事を知ってもらっている温かな安心感につながっていくといいなと思います。

他にも、イベントがあったから関係が育まれるのではない、カギがないから園でおらせてほしい。犬がいなくなったから探してほしい。鳥が庭で死んでいて何とかしてくれないかなど地域の小さな困りごとに対し、その都度自然にやり取りしてきた積み重ねが大事だという職員もいました。アトムが建て替えてしばらくこの地を離れた時には「子どもの声が聴けなくてさみしかった。いるだけでげんきになるわ」と言ってくれた地域の人もいた話も出ました。130人を超える保育園の騒がしい声や音に苦情もなく、親が知らない間に子どもが家から出て迷子になっていた時にも園に知らせてくれたり、学校に行く途中に怪我をした子が園に助けを求めにきてくれるなど、地域の中にある保育であることを実感する出来事は、今も日々たくさんあります。

地域に育まれたり、地域の助けになったりを共にくりかえしていく日常を、これからも大事にしていきたいです。